

An archaeological excavation site showing a vertical trench. The soil is light brown and contains various artifacts, including a small white object at the top, a larger white object in the middle, and several dark, rounded objects (possibly beads or small stones) scattered throughout. The trench is filled with a yellowish material, possibly a filling or a specific type of soil.

吉備塚古墳の調査

平成18年3月

奈良教育大学



## 凡例

1. 本書は平成14・15年度に奈良教育大学教育改善推進経費(学長裁量経費)で行った奈良県奈良市高畑町に所在する吉備塚古墳発掘調査の概要である。
2. 本書は奈良教育大学平成17年度教育改善推進経費(学長裁量経費)によって作成した。
3. 調査主体者：奈良教育大学(学長 柳澤保徳)、吉備塚古墳調査委員会
4. 吉備塚古墳調査委員会：平成14年度委員長 伊達宗泰(花園大学名誉教授)、平成15年度委員長 和田晴吾(立命館大学)、副委員長 長友恒人(奈良教育大学)、中村 浩(大谷女子大学)、西山要一(奈良大学)、寺沢 薫(奈良県教育委員会文化財保存課)、松田真一(橿原考古学研究所調査研究部)、森下恵介(奈良市教育委員会文化財課)、脇田宗孝(奈良教育大学)、山岸公基(奈良教育大学)、大山明彦(奈良教育大学)、金原正明(奈良教育大学)
4. 調査担当：金原正明、長友恒人、下岡順直(平成14年度)、西村誠治(平成15年度)
5. 平成15年度においては、奈良県立橿原考古学研究所と奈良市教育委員会に調査協力を願い、佐々木好直氏、鐘方正樹氏の助力を得た。
5. 調査補助作業：青木智史、東央、天野歩、池野祐季、猪俣彬、石田直美、岩井達也、井殿加奈子、牛嶋博秀、内田雅哉、梅本弘美、江島慈心、大浦史雄、大槻なつ美、大西香菜、岡村美代子、小畑直也、金見亮一、川井智子、木下千巡、久家千幸、国木田大、黒沼保子、高力真実、小林由弥、崎枝綾乃、佐々木泰司、笹田幸佑、佐藤真希、椎木さと子、島村果苗、下田高史、下出將嗣、須崎憲一、高橋千裕、竹野真一郎、田中龍太、谿口善子、田村亘章、塚崎裕、土本仁美、東藤隆浩、等々力明子、中川香織、長塩永子、長門伸、中村美枝子、波岡久恵、西上広恵、西尾三知代、延歩美、初村武寛、羽場克晃、濱口綾、原田うの、樋口拓央、菱川淳子、深谷聡、福田悠里、福富恵津子、古谷文男、増田梨恵、丸山和代、三本周作、村上真理、目黒かれん、森本国宏、山崎健太、山崎美聡、綿谷静夏
6. 整理作業：上記の調査主体、調査担当、調査補助作業者及び上本理恵、小幡千晶、楠京子、高谷倫子、永井理恵、長谷川歩、深瀬亜紀、竹内侑子、金原美奈子
7. 調査前には阿見雄之氏(当時東京工業大学大学院)らによって、レーダー探査および電気探査が実施された。
8. 執筆・編集者：本書の執筆は、各担当が行い、文末に明記している。編集は金原が行った。



## はじめに

奈良教育大学構内にある吉備塚古墳の学術調査を平成14年度と15年度に実施しました。調査の過程で二基の埋葬施設が確認され、三累環頭大刀、貝装雲珠、挂甲等学術的価値の高い遺物が多数出土しました。予想に反する貴重な遺物が出土したこともあって、調査は道半ばであります。現在までに知り得た概要を報告することといたしました。

吉備塚は江戸時代の古文書にも大和の名所のひとつとして取り上げられており、吉備真備の墓と伝承されてきました。明治時代には旧陸軍連隊の敷地内に取り込まれ、戦後米軍キャンプとして接收されましたが、敷地の返還にともない昭和33年に、現在奈良県庁などがある登大路町から本学が移転しました。吉備塚古墳が盗掘を受けず、不完全ながらも墳丘の形を留めているのは、このような歴史的背景が幸いしたものと考えられます。

現在までの調査の結果、吉備塚は六世紀の古墳であることが明らかになりましたが、奈良時代を代表する碩学である吉備真備の名を冠する古墳は教育研究の府に相応しい歴史的遺産であり、今後とも古墳の保存とともに調査を継続し、その成果を後世に伝えていく所存です。

本調査は、調査委員会（平成14年度：故伊達宗泰花園大学名誉教授、15年度：和田晴吾立命館大学教授）のご指導の下に、古墳時代研究に新たな知見を加える学術的調査として実施することができました。調査当初からご指導いただきました調査委員会の先生方をはじめ、調査中あるいは出土遺物の整理過程で貴重なご助言をいただきました先生方、考古学関係者、その他の関係各位に心からの敬意と感謝を申し上げます。末尾ながら、平成14年度委員会委員長としてご指導いただいた伊達宗泰花園大学名誉教授のご冥福をお祈りいたします。

平成18年3月

奈良教育大学

学長 柳澤保徳



## 調査経緯

吉備塚古墳は奈良県奈良市高畑町に所在する奈良教育大学構内の北西部に位置する。吉備塚古墳は古くから吉備真備の墓と伝承されてきた。いつ頃から吉備塚と称されるようになったかは明らかでないが、江戸時代の「南都名所集」や「奈良名所八重桜」に大和の名所の一つとして紹介されていることから、この時代には既に真備と関連づけられていたと考えられる。ちなみに、吉備塚古墳から北北西約300mに真備とともに入唐した僧玄昉の首塚とされる頭塔があり、東約450mには藤原広嗣を奉った鏡神社が位置している。

明治41年に旧帝国陸軍歩兵第53連隊が高畑町に置かれたことによって、吉備塚は連隊の敷地内に取り込まれた。昭和20年に米軍に駐屯地（米軍キャンプC地区）として接収された後、昭和33年に奈良学芸大学（当時）が登大路町から移転した。大学校舎の建設によって旧陸軍の建造物は現在教育資料館として使用されている旧糧秣庫のみが残されたが、吉備塚古墳は西南角が削平されているものの、江戸時代の状態がほぼ現存していると推定される。吉備塚古墳周辺の若草山山頂から古市にかけては多くの古墳があるが、その多くは寺社の築造や土地利用によって改変され、墳丘の形を留めている例は少ない。吉備塚古墳が大きな改変を受けずに残されたのは、吉備真備の墓であるという伝承とともに、明治時代以降に官有地とされたことが幸いしたのであろう。

吉備塚古墳は奈良県遺蹟地図には当初より円墳として記載されているが、昭和61年に墳丘の頂付近から画文帯環状乳神獣鏡と鉄鏃などが表採され、古墳であることが再確認された。画文帯環状乳神獣鏡は内区が欠けた状態であったが、江田船山古墳出土鏡など9面の出土鏡と同型鏡であることが判明した。その後、平成10年に花園大学によって墳丘の測量が実施されて墳丘の規模と墳形が確認されたが、発掘調査は行われなかった。

平成14年度に奈良教育大学の教育研究プロジェクトの一環として、調査委員会（委員長、伊達宗泰花園大学名誉教授）を組織し、墳頂部の埋葬施設と墳丘封土の範囲確認を目的として調査を実施した。墳丘の一部



画文帯環状乳神獣鏡  
(昭和61年表採、内区片は平成14年出土)

(特に東側)は削平を受けて原形を留めていなかったが、墳頂部は盗掘を受けておらず、2基の埋葬施設が確認され、鉄製品が出土した。平成15年度（調査委員長、和田晴吾立命館大学教授）は、墳丘北側と南西方向の範囲確認と埋葬施設の精査を目的として調査を行った。調査に当たっては奈良県立橿原考古学研究所及び奈良市教育委員会から援助を受け、埋葬施設の精査と第2埋葬施設から検出された三累環頭大刀、貝装雲珠、挂甲などの遺物を取り上げた後、後世の土坑断面に露出している第1埋葬施設の遺物に保存処置を施し埋め戻した。 (長友)



## 現状と立地

吉備塚古墳は、奈良盆地の北東部、東大寺大仏殿の南約1.5kmの緩やかな段丘面上の標高110mの地点に位置する。周辺は春日断層崖下につらなる段丘面が南北方向に発達しながら西傾する。東西方向には解析谷が発達し、北の飛火野南縁の谷と南の能登川の谷に画されている。吉備塚古墳は径約20m高さ約3mのこんもりとした比較的なだらかな小さな塚で、現在はクヌギの大木が数本生えササに覆われる。以前はマツ林であったという。その名が示すとおり奈良時代に遣唐し暦学などを伝えた吉備真備の墓と古くから伝えられ、さわるとたたりがあるとも言われ、現状が残されるに至ったようである。埴輪等の表採はなかったが、昭和61年に古墳時代中期後半の特徴を有する画文帯環状乳神獸鏡が採集され、吉備真備の墓とは時代が異なる明らか古墳である可能性が高くなった。平成14年度から15年にかけての本学術調査により、5世紀後葉から6世紀初頭の埴輪片や埴頂部から2基の木棺直葬が発掘された。周囲に古墳は少ないように見えるが、東方の頭塔の下部に古墳があり、北側約1kmの飛火野に小円墳で構成される御料園（春日）古墳群、さらに北方の若草山頂上には前方後円墳の鷲塚古墳がある。また、南2kmの地点に古市方墳といくつかの古墳が分布し、南方に向かっても古墳が点在し、奈良盆地の北東縁の段丘面上には比較的多くの中後期の古墳が南北に分布している。吉備塚古墳はこれら一連の古墳の1つとみなされる。 (金原)



吉備塚古墳 南東から



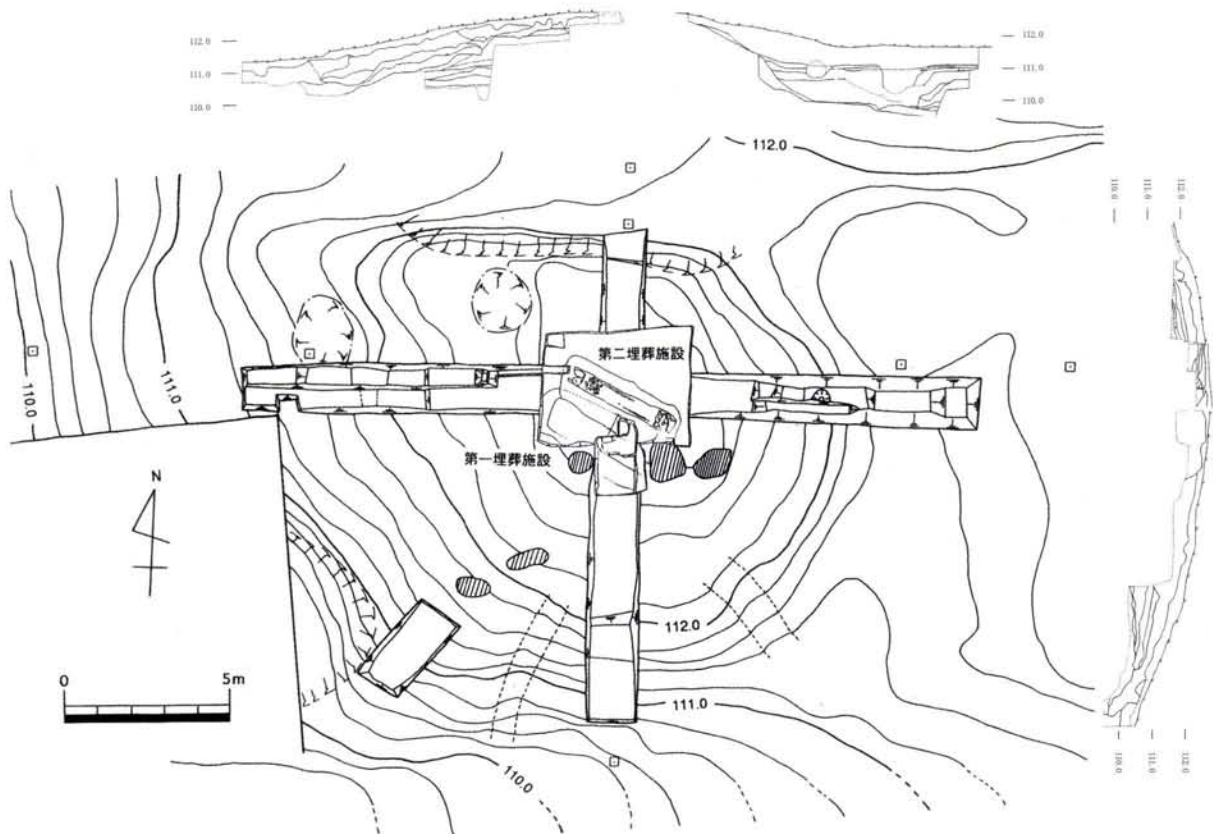
## 平成14年度調査



墳丘調査

平成14年度調査は、平成14年11月25日～平成15年1月24日にわたって実施した。調査開始前、東京工業大学大学院阿児雄之氏（本学卒業生、所属は調査当時）らによって、レーダー探査および電気探査が実施された。墳頂部付近に若干の反応が見られたものの、有効な手がかりを得ることはできなかった。

調査は、墳丘を中心に東西南北方向に十字形にトレンチ（Eトレンチ、Wトレンチ、Sトレンチ、Nトレンチ）を1.5m幅で設定した。各トレンチは、長さ3mごとに墳頂部から端部に向かって算用数字（1、2、3・・・）を用いて細区分した。レベルは、奈良教育大学正門の北側にある基準点よりレベル移動を行った。各トレンチでは、古墳封土の確認を主に行ったため、トレンチの完掘を目標とせず、各トレンチの端において、地山のレベルまで部分的に掘り下げるにとどまった。その結果、WおよびSトレンチにおいて、墳丘盛土の分布が墳頂部から約9mの地点まで確認された。



地形図及びトレンチ配置



Eトレンチでは、東半分は急激に落ち込み、深さ1～1.5mまで近・現代の埋土および攪乱土であり、その下部に近世から中世の整地層とみられる堆積物が分布し、灯明皿片・布目瓦片等が主に出土した。

Wトレンチでは、表土下約50cmまでは中近世の堆積層が分布し、その下部は墳丘の盛土が分布し、砂とシルトが層状に堆積している。墳丘の盛土から埴輪片が出土した。墳頂部では埋葬施設の一部が検出され、小札と鉄刀が確認され、埋葬施設が遺存していることが明らかになった。

Nトレンチでは、表土下は層状の墳丘盛土となっていた。

Sトレンチでは、昭和61年に表採された画文帯環状乳神獸鏡の内区の一部と考えられる破片が、近代の攪乱坑の上部において鏡面を上にして検出した。

調査期間の制約のため、金属遺物についてすべて取り上げるまでには至らなかった。そこで、応急の保存処置を施して一旦埋め戻した。なお、取り上げ



Wトレンチ



Eトレンチ調査風景



た金属遺物については迅速に洗浄を行い、X線ラジオグラフィィを行った。また、蛍光X線分析により、墳頂部で検出された赤色顔料は水銀朱であることが、表土から出土した15枚の寛永通宝は成分的に3種類に分類できることがわかった。(下図)

トレンチ・出土層・地点	土師器	土師質	灯明皿	布目瓦	瓦	瓦質	瓦器	埴輪	須恵器	陶器	磁器	レンガ	石製品	金属品	備考
E-1 表土		20	9		1				1		2				
E-1 1層		4											1	1	砥石/鉄片
E-1・2 攪乱層		18	1		11	2				3	7	1		1	鉄鏝
E-2 表土		1									2	1			
E-2 攪乱層		16					1			2	6			1	鉄鏝
E-2 1層				2					2		1				
E-2・3 表土		1							1						
E-3 攪乱テラス状				2											
N-1 表土														1	寛永通宝
S 表土		10									1	1			
S-1 表土		30	11		1			2	2	1	2				
S-1 攪乱坑														1	鏡片
S-1 1層		5													
S-1 東北端												1		2	鉄鏝
S-1 東セクション			1												
S-1・2 半さい		1													
S-2 表土		29	21	1	5					1	3	8			
S-2 1層		14	8		4					6		1		1	鉄製品
S-2・3 1層								1							
S-3 表土	1	114	5	16	10	2	10	1	3	1	2	1			
S-3 1層		163	10	1	7	4	3	3			11			1	寛永通宝
S-3 攪乱土			5		1	1		2							
W-S 表土		42			10	1	2	30		2	1	11			
W-S 表土下		11	5					16	1	2	2	1			
W-S 旧表土		32	9		1			5	4		2			2	鉄製品
W-S 1層		11			2			9				4		1	鉄製品
W-S 西壁								1							
W-S 封土断ち割り上部		2													
W-S 盛土層西壁								1							
W-2・3 表土			6												
W-3 2層		1					2	49							
W-3・4 北側半さい		6						2	1						
墳頂部 表土		96	16	2	15	1	1	1		6	5	2	1	8	寛永通宝
墳頂部 拡張区表土		18	2		1	2			2		1	2		1	鉄片
墳頂部 北拡張部		33	5	1	4	1					1	1			
墳頂部 木の根元		46	6	1			1			1				1	鉄製品
墳頂部 土糞下		11													
墳頂部 南西拡張区		8	2				1								
墳頂部 南西表土拡張		49	13			1				1	1			2	寛永通宝
墳頂部 東		32	4						2		1				
墳頂部 東拡張区		34	11					1		1	2			7	鉄製品
墳頂部 東表層		3							1					2	鉄製品
墳頂部 ベルト部壁		34	4				1			4	1				
墳頂部 ベルト部表土		26	10	1				1	1	9	2				
墳頂部 北東表土拡張部	1	44	7			1	3		1	2				7	鉄製品
墳頂部 埋土		68	3	1	10						5	10		6	寛永通宝
墳頂部 東拡張部 表土		36						2	1					5	雲珠片
墳頂部 壁面北東		68	7		2		1			3	1			1	寛永通宝
墳頂部 ベルト部 表土		75	2	1			1			3	10			1	寛永通宝
表探		8	11	3				3	4		1			3	寛永通宝
合計	2	1220	194	32	85	16	29	130	29	74	73	45	2	56	

平成14年度調査遺物一覧



出土埴輪 (Wトレンチ)



出土埴輪 (Wトレンチ)



## 墳丘と出土遺物

平成14年度調査で設定した東西南北の十字トレンチにより墳丘と墳頂部の埋葬施設の様相が確認できた。墳丘は周囲から攪乱を受け、南部と西部および南西部では封土が確認されるが、東部と北部は大きく改変される。径約25m以上の円丘が推測されるが、高まりが北西に延びるため推定全長約40mの前方後円墳になる可能性もある。比高は約4mである。墳丘の攪乱層から5世紀後葉から6世紀初頭の埴輪が主に中世以降の遺物と伴に出土する。出土遺物は多様で、灯明皿を含む土師質土器が最も多く、瓦、陶器、磁器などが出土する。埴輪はSトレンチとWトレンチに多く、いずれも原位置は保たず、後世の攪乱を受ける。瓦には布目瓦があり、調査地の東側の新薬師寺との関連が考えられる。墳頂部は攪乱が少ないが、封土の流出が著しく、ほぼ表土直下に埋葬施設が位置する。表土層からは灯明皿と寛永通宝が目立って出土した。表土層および直下からは錆束となった鉄鏃などが出土するが原位置は保たれていない。Sトレンチの墳頂部に近接する近代の攪乱坑の上部から画文帯環状乳神獸鏡の内区の破片が出土した。 (金原)



墳頂部鉄鏃出土状況



墳丘



## 平成15年度調査

平成15年度調査は、平成15年11月25日から平成16年2月14日まで実施した。墳頂部の区画拡張をおこない、前年度一部を検出した埋葬施設の精査を行い掘り下げ、墳丘の範囲確認のため墳丘の西南部にWSトレンチを1.5m幅、3.5m長程度で設定して行った。



鉄製轡出土状況

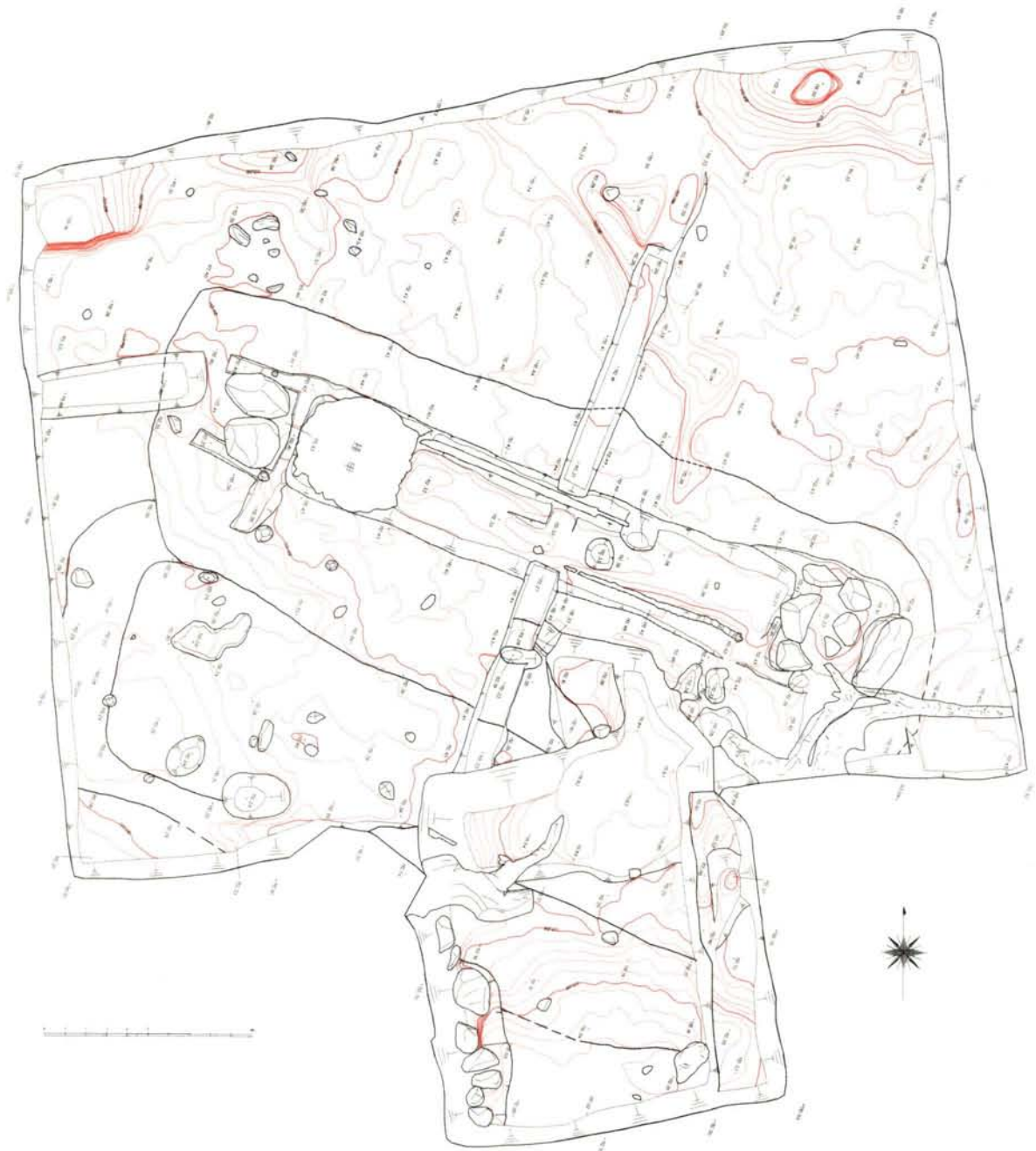
墳頂部では、前回調査時に検出していた挂甲（小札甲）の精査を行い、それと並行して、埋葬施設の墓坑域の確認と精査を行った。埋葬施設は並行して2基が確認され、今回の調査では期間および大木の生育の制約から第2埋葬施設のみを完掘した。墳頂部は前回調査時から調査区画を拡張した。その墳頂部区画拡張のさい、表土直下、第2埋葬施設の東外側から馬具類が出土した。棺内から



埋葬施設作業風景



は前回の調査時に挂甲一領分および鉄刀が確認されていたが、今回拡張した棺の東部からも遺物の出土が予想されたため、慎重に精査を行った。平成15年12月16日、予想されていた場所からやや南方の、棺内南東部より、鉄刀の環頭部を検出した。この鉄刀を慎重に精査したところ、環頭が三累環式のいわゆる三累環頭大刀で、三累環内に人物を配するものでありきわめて珍く、残存もよいものであることが判明した。この三累環頭大刀は、年末年始の盗難等の心配を考慮して、全容が判明したところで急遽取り上げを行った。取り上げ後は室内にて検出を行い、ある程度検出を終えたところで、平成15年12月27日、奈良大学西山研にてX線ラジオグラフィーを行った。これにより、刀身に2対の人物像（神像）、龍虎文および2対の花文の計3組の象嵌が施されていることがわかり、他に類をみないきわめて貴重な遺物であることが再度確認された。



埋葬施設 写真測量図





埋葬施設



写真測量

年明けより、墳頂部の第2埋葬施設の掘り方の検出を行い、第1埋葬施設との切り合いについても検出を行った。さらに、第2埋葬施設の棺中央に直行する断ちわりを入れ、第2埋葬施設および第1埋葬施設の木棺の形状の確認を行った。これにより、第2埋葬施設は割竹形木棺直葬、第1埋葬施設は箱形木棺直葬であることを確認した。また、この断ちわり時に三累環頭大刀の鞘尻を検出した。

挂甲の全容をほぼ検出した段階で、全体の写真を撮影した。その後、第2埋葬施設の



すべての遺物を取り上げた。取り上げの際、挂甲はブロック状で取り上げを行った。最後に木棺の棺底を精査し、両木口面に断ちわりをいれ、木口板の検出をおこなった。

WSトレンチでは、攪乱土内に埴輪片が出土するなどしたが、攪乱土以下は大きな削平を受けていなかった。最終的に旧表土まで掘り下げ、完掘した。その結果、円墳、あるいは前方後円墳の後円部の範囲を推察する結果を得た。(西村)



第2埋葬施設 挂甲 (小札甲)

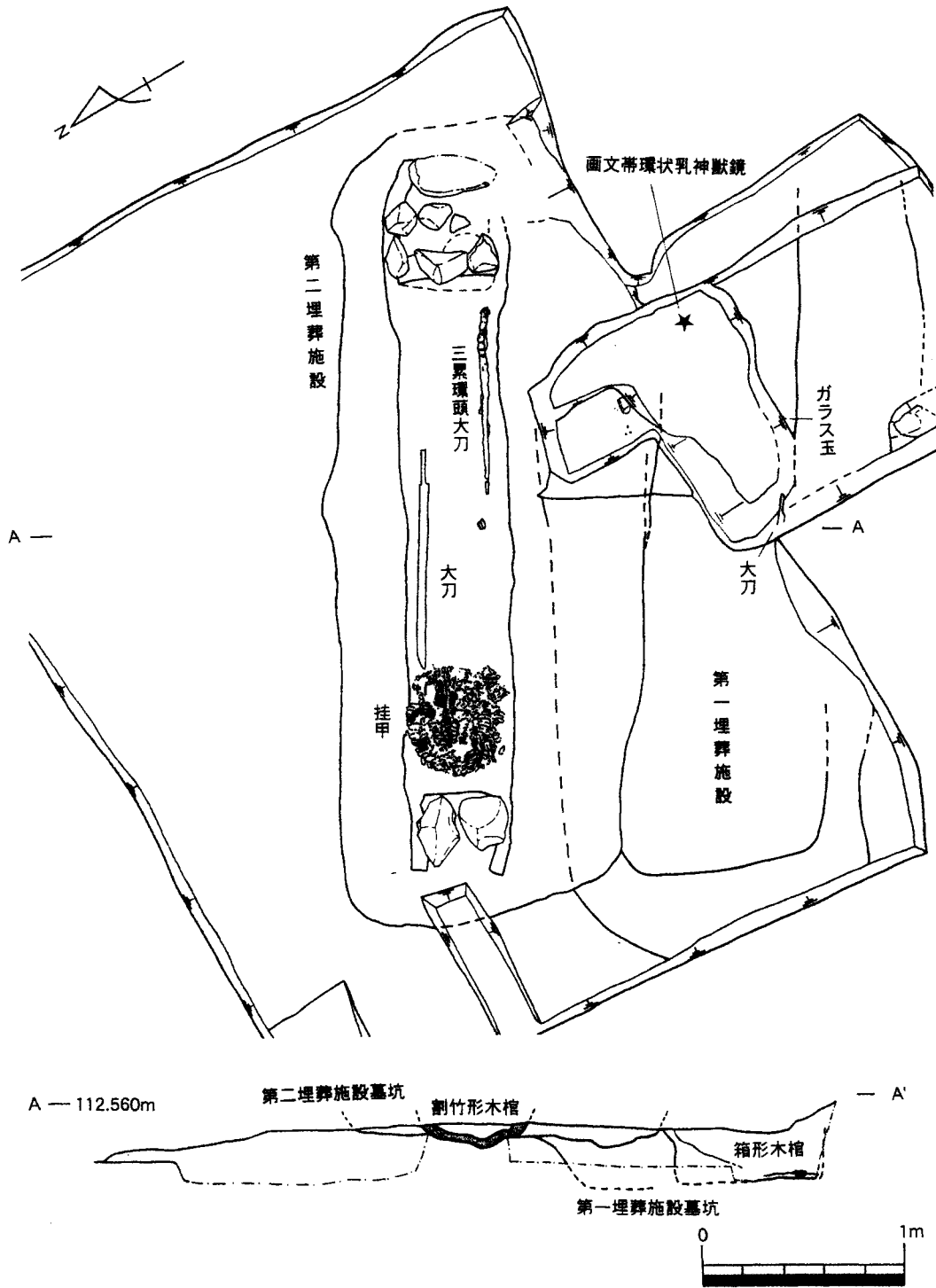


第2埋葬施設 鉄製大刀と鞆尻金具



# 埋葬施設

埋葬施設は、平成15年度調査において南北に2つあることを確認した。いずれも軸を東南東から西北西に向け並行する。南側の埋葬施設(第1埋葬施設)が北側の埋葬施設(第2埋葬施設)より床面が低く、墓壇の切れ合いから第2埋葬施設が上部になる。



埋葬施設



第1埋葬施設の上部面付近から長茎鎌が錆束の塊または散乱して検出され、第2埋葬施設の北東側から雲珠と鉄製轡が検出され、いずれも原位置を保たないが、第2埋葬施設の棺外遺物とみなされる。

下部にあたる第1埋葬施設は、箱型木棺の直葬で、弱い朱面が確認される。東部に近代の攪乱坑があり、昭和61年に表採された画文帯環状乳神獸鏡の破片が出土した。紺色のガラス小玉が検出されたほか、トレンチ西断面に鉄刀の茎が覗く。平成15年度調査区以外は未掘である。第1埋葬施設では、画文帯環状乳神獸鏡とガラス小玉が出土した。画文帯環状乳神獸鏡は熊本県江田船山古墳など9面の同型鏡が知られている。

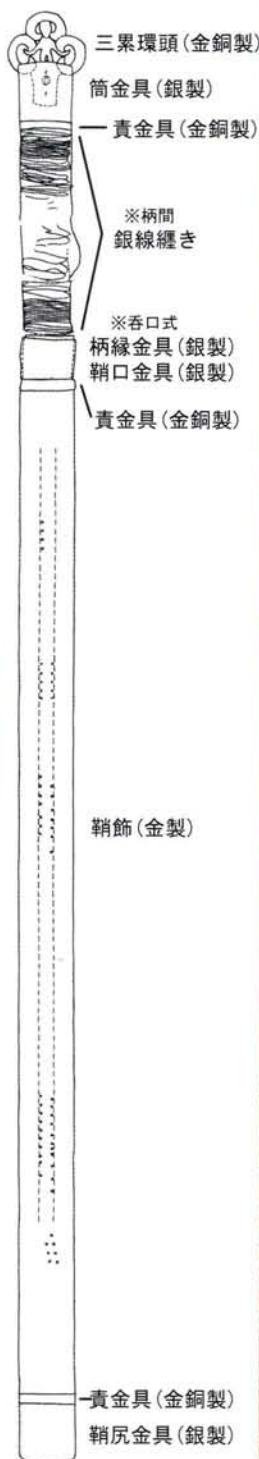
第2埋葬施設は、割竹形木棺直葬で、両木口に人頭大の石を配する。全長約350cm、内法約250cm、現存で幅約50cm、深さ約10cm。棺内には、南東の棺側に三累環頭大刀、北西の棺側に鉄製大刀、西側木口に挂甲が副葬される。三累環頭大刀と鉄刀は刃先を外側に向け、三累環頭大刀は佩裏を上面とする。第2埋葬施設の副葬品である三累環頭大刀は、長さ約93cm、幅約3cm。三累環式の柄頭を有する。柄装具は、三累環頭、筒金具、銀線、柄縁金具と続く。三累環は金銅製で、下方



鞘尻側面



鉄製轡



復元図 (1/5)

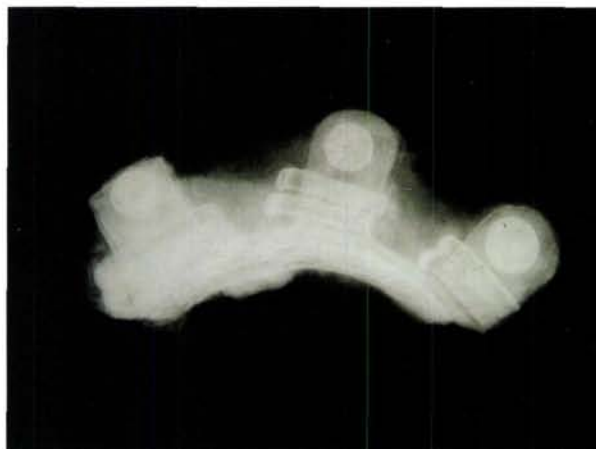


三累環頭大刀





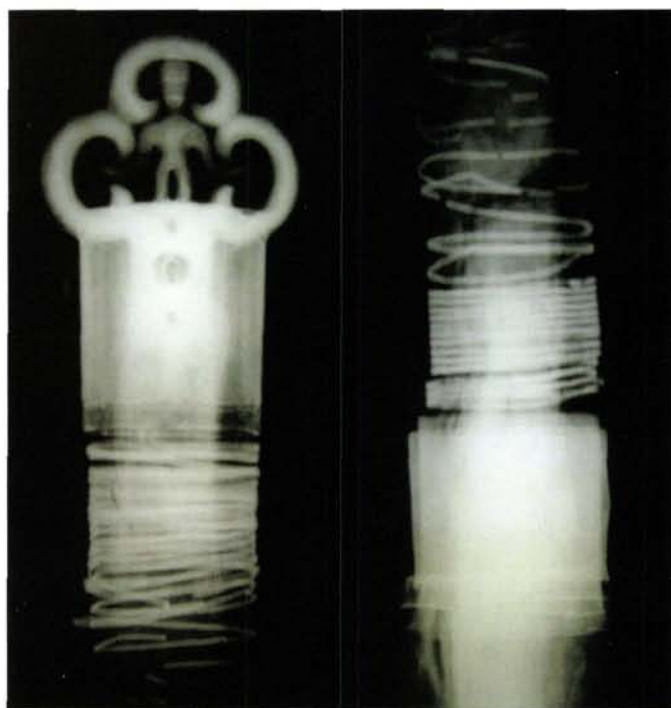
レントゲン撮影 (西山)



雲珠レントゲン



鞍飾り金具と布 (実体顕微鏡)



三累環頭大刀柄レントゲン

の二環が筒金具に喰い込み基部の区別が明確でなく古式である。三累環内に金銅製の人物像(神像)を配する。環頭の茎と刀身の茎を鉄製目釘によって筒金具も含めて綴じ合わせる。筒金具と柄縁金具はいずれも銀製で、筒金具は断面八角形を呈し、返りはない。責金具は金銅製で刻み目等が施される。柄間は刻み目のある銀線纏きで両端が密である。鞘口金具は銀製筒形で内部に鞍縁金具が入り込み、呑口式となる。鞘口金具の切先側にも同様の金銅製の責金具を有する。鞘には一条の金製の鉾留めの飾りが入り、布が残存する。鞘尻金具は少し離れて検出された。同様に銀製で責金具を伴う。なお、佩表となる下面には、特に布、木部の残存が認められる。レントゲンにより、刀身に人物像(神像)、龍虎文、花文の3対の象嵌を持つことが判明した。鞘尻金具はやや離れて検出されたが、筒金具同様に銀製で断面八角形であり責金具を伴い布9が残存する。第2埋葬施設の副葬品は、他に鉄製大刀(長さ約113cm)と西側木口に挂甲(小札甲)がある。棺外からは長茎鏃、雲珠、鉄製轡が検出され、雲珠は金銅製の貝装雲珠で、レントゲン撮影から脚部の鉾などは銀被せが認められる。(金原)



## 吉備塚古墳出土三累環頭大刀刀身象嵌文様—神仙図像の日本における古例

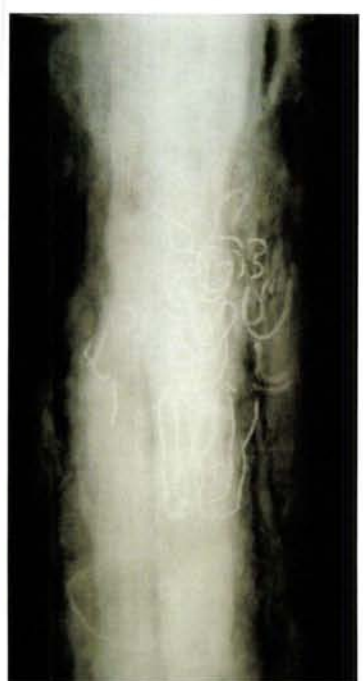
吉備塚古墳出土三累環頭大刀刀身象嵌文様（5世紀後半と推定）は、神仙を人の姿で表した日本における古例であり、中国神仙図像の日本への伝播や日本における神像の成立に示唆を与える新出作例として注目される。

三累環頭大刀刀身の文様は銀象嵌とみられ、表裏に柄側から人物像・龍虎・植物が表される。文様は研ぎ出しが未了で現状ではレントゲン写真に拠るしかなく、重なり合う表裏の文様の分離に課題を残すものの、烏帽子状の被り物をつけ、算用数字の3に似た耳が大きく、肩・腰から羽が生える人物像の像容は、「図仙人之形、体生毛、臂變為翼、行於雲」（『論衡』無形篇）、「耳出頭頂、下垂至肩」（『神仙伝』王興伝）といった中国後漢～魏晋南北朝時代の道教文献に見える仙人（羽人）の姿とよく対応している。また植物文ではロゼットから生じる芽生えのような部分から平行波線状の光焰（または気？）が生じ目を引く。

吉備塚古墳出土三累環頭大刀刀身象嵌文様に個別に表された図様を一画面中に総合的に表現した例として、中国江蘇省丹陽市建山金家村墓・胡橋吳家村墓等にみられる羽人戯虎図・羽人戯龍図磚壁画が注目される。ここでは羽人（仙人）が光焰（または気？）を放つ植物（芝草か）を手にして龍や虎を導き、光焰を放つ植物は空間をも満たしつつ飛行する。羽人は耳が大きく肩・肘・膝から羽が生えており、腿から足先にかけての輪郭が露わなところも三累環頭大刀象嵌文様の仙人像と軌を一にしている。金家村墓は南朝斉明帝（498年葬）の興安陵、吳家村墓は同じく南朝斉和帝（502年葬）の恭安陵と考証されており[曾布川寛「南朝帝陵の石獣と磚画」（『東方学報 京都』第63冊）]、三累環頭大刀象嵌文様は中国南朝の羽人戯龍・

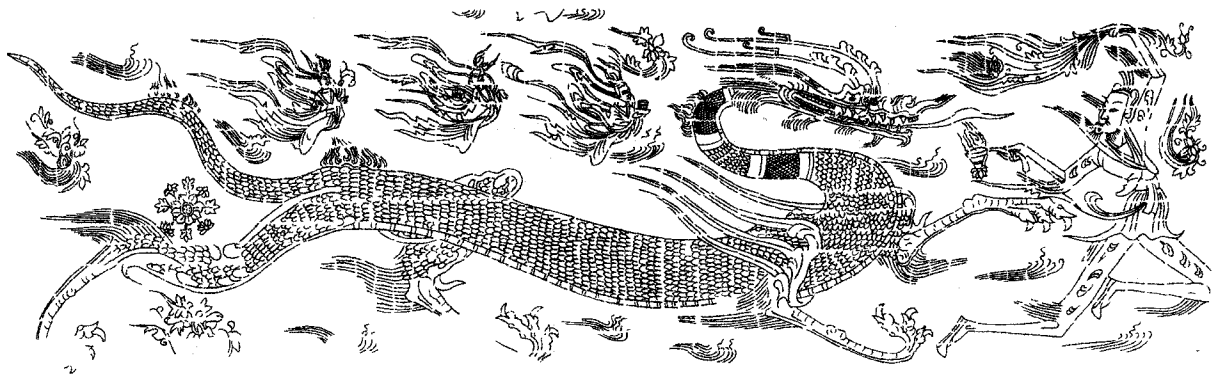


三累環頭大刀柄



三累環頭大刀象嵌レントゲン





中国江蘇省丹陽市胡橋吳家村墓 [=南齊和帝恭安陵。502年葬] 羽人戲龍図磚壁画 線図  
 [『江南の文物 中華人民共和国南京博物院・無錫市博物館特別展』図録(明石市立文化博物館)より]

羽人戲虎図像の日本的展開と考えて大過ないものと思われる。

南朝齊は、5世紀の日中交渉史の掉尾を飾るかのように、建元元年(479)いわゆる倭の五王の第五に当たる倭王武(=雄略天皇)に鎮東大將軍の号を授けており(『南齊書』東南夷伝)、中国南朝の羽人戲龍・羽人戲虎図像が直接的に日本に伝えられる時期として、日中直接交流の途絶える6世紀よりも5世紀後半(雄略朝)の方がよりふさわしい。また雄略朝期日本における金属象嵌技術の飛躍的進展は、「獲加多支鹵大王(ワカタケル大王=雄略天皇)」金象嵌銘を有する埼玉・稻荷山古墳出土鉄劍(辛亥年=471年)、「獲□□鹵大王」銀象嵌銘を有する熊本・江田船山古墳出土大刀などからも窺い知ることができ、三累環頭大刀刀身を5世紀後半に位置づける想定は国内作例との比較からも支持される。なお、三累環頭大刀に伴出した刀装具の年代としては6世紀第2四半期頃が想定されるが、奈良・東大寺山古墳出土花形飾環頭大刀が中国・後漢中平年間(184~189)の金象嵌銘をもつ刀身に日本4世紀の花形飾環頭を伴うように、象嵌の施される稀少な刀身の刀装具は更新される場合もあり得たことが留意されよう。

両脚部の輪郭に同時代の埴輪などの概念的表現とは一線を画した自然味のある三累環頭大刀刀身象嵌文様の仙人像は、雄略朝期の仙人のイメージを現代に甦らせ、日本における神像成立前史を目睹させる稀有の図像資料と評価することができよう。5世紀後半雄略朝期における人の姿をとる神=仙人像の受容が、6世紀前半の仏像を伴う仏教伝来の前提をかたちづくったかとも憶測され、今後詳細な検討を加えてゆきたい。

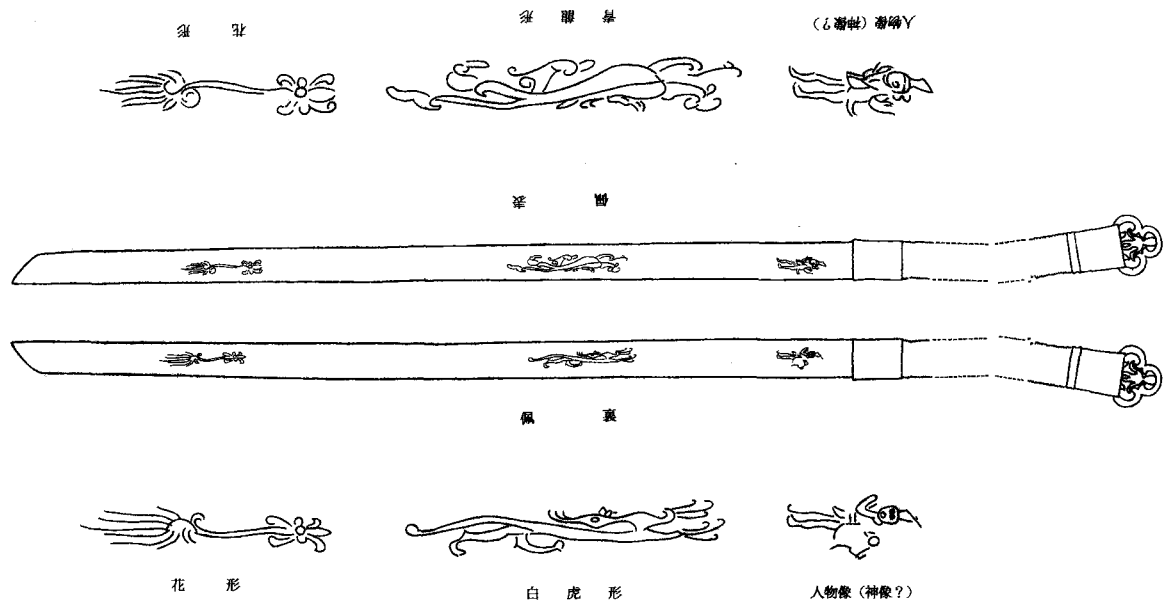
(山岸)

## ま と め

吉備塚古墳は、二つの埋葬施設をもつが、当初につくられた南側の第1埋葬施設は、埴輪と画文帯環状乳神獸鏡の年代観から、5世紀後葉から6世紀初頭の年代観が考えられる。第2埋葬施設は三累環頭大刀と貝装雲珠などから、6世紀の第2四半世紀頃が推定される。この年代観から、第1埋葬施設および吉備塚古墳の築造は6世紀初頭が妥当ではないかとみなされる。なお、第2埋葬施設の被葬者は、吉備塚古墳が比較的小型であること、珍しい象嵌を有する三累環頭大刀および挂甲や馬具類を副葬品としてもつことから、極めて特殊な地位や役割の武人が想定されると考えられる。

(金原)





三累環頭大刀象嵌文様（西山）

参考文献

- 『奈良市史 考古編』 奈良市 1968年  
 『奈良県遺跡地図第一分冊』 1971年～1998年  
 粉川昭平・清水康二「吉備塚古墳表採の銅鏡について」『青陵』第77号 奈良県橿原考古学研究所 1991年  
 曾布川寛「南朝帝陵の石獣と磚画」『東方学報 京都』第63冊 1991年  
 『古墳測量調査集成 I 花大考研報告』 花園大学考古学研究室 1998年  
 穴沢和光・馬目順一「三累環刀試論」『藤沢一夫先生古希記念論集 古文化談叢』藤沢一夫先生古希記念論集刊行会 1983年  
 橋本英将「外装からみる装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る』鉄器文化研究会 2003年  
 金原正明「遺跡速報 吉備塚古墳」『月刊考古学ジャーナル 9 No.520』2004年  
 山岸公基「仙人と「現人之神」—吉備塚古墳出土三累環頭大刀刀身象嵌文様の紹介を兼ねて—」『論集 カミとほとけ —宗教文化とその歴史的基盤— ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集 第3号』東大寺 2005年

吉備塚古墳の調査

平成18年3月31日発行

編集 奈良教育大学文化財コース

発行 奈良教育大学

印刷 (株)ABS



KIBI-DUKA Tumulus  
of  
The Kofun Culture at Takabatake,  
Nara, Nara, Japan



2006

Nara University of Education